

# 「『夢

ふらみか

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

TOX2、いいですよ。ゲームをして、ぼろぼろ泣きました。漫画を読んで、ぼろぼろ泣きました。とにかく泣きました。

さて、今回は、そのTOX2の「レイア」さんにスポットを浴びせました。彼女、とても可愛らしいですよ。彼女を見ていると、私も頑張らないと、みたいな気分になります。

あとは、アグリアさんです。私個人としては、アグリア生存説を押ししたいのですが、公的で死亡扱っているのです、おそらくないでしょう。でも、分史世界のように、可能性は無限です。アグリアさんが世界のどこかでひっそりと幸せに生きていることを、ずっ

と願ひ続けます。

あとは、あれですよね。クルスニク兄弟を幸せにしたいですよね。

願わくば、オリジンさんに慈悲があり、ルドガーさんかエルさんの分史世界が消滅していませんように。

※P i x i vにて投稿しました「『夢』」と同一のものになります。投稿テストも兼ねておりますので、ご了承ください。

# 目次

『の中』	1
『は、いつか醒めるモノ』	17
『が醒めた、その後』	26

# 『の中』

私、レイア・ロランドは、案内された更衣室に用意された一着のメイド服を眺め、深い溜め息を吐いた。

どうしてこうなっちゃったの。

……うん、少し思い返そう。

###

カラハ・シャルルに降り立ち、さっそく皆と別れて。私は、大風車の前で「ル・ロンドの次にここはいいなあ。もし、故郷を離れて永住するなら、ここにしようかな」なんて、少し柄でもない考え事をしていた。

風のくすぐりは気持ちよく、私の頬を撫でては風車を回し、笑い声を上げる。

少し乾燥してるかな、とか、砂埃が無ければ満点かな、とか、そういつたことも考えていたかもしれない。

ともかく、私は、なんとなくポーっとしていたのだった。

じつと大風車を見つめ、風の精霊の微笑みにつられて私も笑みを浮かべ——と、急に、私の腕が引っ張られた。

驚きはしたものの、振り返ると見知った顔がそこにあり、私はすぐに胸を撫で下ろす。悪漢の様なものじゃなくてよかった、と思うのも束の間、彼女の少し怒っているような表情は、私から出てこようとする言葉を一瞬で飲み込ませた。

領主のドロツセル・K・シャルルは、一体何に怒っているのだろう。知らず知らずに、何か悪いことしちやつたのだろうか。あの屋敷の高そうな壺とか、知らないうちに壊しちゃつてたりとか？

記憶にない記憶を呼び起こそうとしていると、彼女は私の腕を引つ張り、どこかに連れて行こうとする。転びそうになる足をなんとか運び、私は彼女に抵抗せず、その後を付いて行く。もつとも、手は放されていないので、付いて行くしかなかった。

「まったく、またふらふらして。今日だけは連れて帰らさせていただきますよ、レイア」

「えっ、ちよっ、あの」

「あの娘、レイアじゃないと嫌だつてきかないのは、分かつてるはずですよね？」

「え？　え？」

「そうでなくとも、最近は屋敷を抜け出し過ぎです。もつと、彼女の侍女であることを意識して下さい。それとも、今日の予定を忘れていたわけではありませんよね？」

###

私の抗議も虚しく、あれよあれよとドロツセルのお屋敷に連行されて、で、こうであ

る。

「……はあ」

何度目かの溜め息は、意図して吐いたものだった。

なんとなく、掴めてしまったような。

とりあえず、自分の状況を皆に知らせよう。GHSでメールを送ると、すぐに「ごめん。そのまま頑張つて。こつちもいろいろと連れ回されちゃってるから」という返事が返つてきた。向こうも向こうで困っているようである。

「あーあ……私、こういうの苦手なんだけどなあ……」

仕方なしにメイド服に袖を通すと、きつくもなく緩くもなく、肌触りもいい上に動きやすく、つい頬が緩んだ。自分用に逃えたように、とても馴染んでいる。このまま普段着にしてもいいかなあ、とか思ってしまった自分が悔しい。

あまり更衣室に長居するのも怪しまれる、と考える一方で、どうにも足が変で動けない。具体的には、パンツルックより何倍も心許無い下半身が、すーすーして落ち着かない。姿見を見る限り、露出度的には普段着の方が上のはずなのに、である。普段からスカートを穿かない代償が、まさかここで襲つてくるとは思わなかった。

「めくつたら見えちゃうじゃん、これ」

さすがにこの屋敷にめくつてくるような下賤な人間がいるとは思えないけれど。侵

入すら許されないような警備体制だとも思える。それでも、ここを安全地帯と言うには、些か自信が無い。風の精霊は、悪戯好きなのだ。開かれた窓やドアをすり抜けて無邪気に駆け抜けていくものである。

「レイア？ 準備はまだですか？」

「は、はぁーい。今すぐにー！」

待ち侘びたのか、ドロツセルの声が聞こえてきた。

う、ううむ。仕方ない。

前述した通り、露出は普段より少ない。このことはあんまり気にしないようにしよう。

私は気持ちを入れ替え、更衣室を後にする。

###

更衣室を出てすぐ、待ち詫びたような雰囲気ドロツセルに再度捕まり、私は一室の前へ案内された。

「さ、お姫様が首を長くしてお待ちかねよ」

微笑む彼女に少し胸の鼓動が高まる。先程の怒った表情の彼女は凛としていて、普段の柔らかな物腰とのギャップについて口を噤んでしまったが、今の彼女の表情は、別の意味で言葉を奪っていく。

私が男だったら、恋に落ちていたかもしれない一瞬だった。高嶺の花を、遠くから見守るだけになりそうな恋に。

……いやいや、現実逃避し過ぎだ、私。今はそれよりも。

お姫様、と言ったか、彼女は。

ドロツセルでも、位は十分に高いように思える。なんたつて彼女は、ここカラハ・シャルルの領主なのだ。実質、この街一番の権力者と言つても過言ではないだろう。お嬢様のような——というより、本当にそうなのだが——見た目ではあるが、その手に握られているのは、この街の未来なのである。

今しがた、その彼女の口から出てきたのは「姫」という単語だった。お嬢様よりもさらに上の、もっともつと煌びやかで輝かしくて華やかで……と、私の中のお姫様のイメージは語る。

姫と対にある「王様」というのは見たことがある。というか、現在進行形で共に歩いている。今は離れているけれど、彼は仲間の一人だ。

その隣に立つのが、お姫様。

……でも、ガイアスの隣に立つのは、煌びやかで輝かしくて華やかな姫君よりも、ミユゼの様な不思議を少し含んだ艶やかな美女が合いそう。と私は考え、思わずにやけてしまった。

「ほら、あんまり待たせたら、お仕置きされちゃうわよ?」

私がいやにやっていると、物騒な言葉が聞えてきた。また話を戻してしまうけれど、煌びやかな姫君より、ミュゼのような美女の方が「お仕置き」という単語もぴつたりだ、と思ひ浮かべ、一瞬だけ頬が上がる。

私は自制も込め、二、三度両頬を叩いた。「姫でも女王でも誰でも出て来い」と意気込んで、ドアノブを握る手に力を込める。

一氣に回し、扉を開いた。

そして、一氣に現実に引き戻された。

なんだかんだ言いつつ、私は少なからず、この領主邸という場所に酔っていたのだと思う。その上、普段着ることのないメイド服だ。苦い表情を浮かべたとはいえ、私も女の子であり、興味がない、わけではなく。つまり、その、端的に言えば、浮かれていた。味わえない空気を身体全体で感じ取り、ほんのりと耳が熱を持つ。ドロツセルから香る、少し甘く、なお且つ高貴な匂いも相俟って、確実に浮き足立っていた。それこそ、自分の立ち場を忘れてしまう程に。

しかし、目の前の「彼女」は、私の熱を急激に吸い取っていく。現実を見ると、喉元に刃物の切っ先を突き付けられた気分になった。冷や汗がうなじを伝う。鳥肌と共に、幽かに手が震えたのを自覚した。

ただ、冷めていく……もとい、醒めていく頭が、一方で「これは夢だ」と訴え始めているのも事実。確かに、これは現実で、同時に、夢である。

「おい、なにノックも無しに開けてんだよ、レイア。つーか、今まで何処行つてたんだ、ああ?」

「……あ」

「いいから早く、着替え手伝えよ」

その、相手の都合を一切排除した物言いから、「彼女」なら「お姫様」と揶揄されてもおかしくはないと思う。記憶の中の「彼女」は、我儘で自分勝手な性格の「彼女」は、私のイメージする「お姫様」と重なっているのであった。

「ん? なに幽霊でも見た顔してんだ?」

だが、私の知る「彼女」より、ほんの少しだけ性格が丸い気がする。ほんの、ちよつとだけ、だけど。それでも、今の「彼女」の口振りからも感じられる「他人を振り回すような性格」は、今の「彼女」を「姫」というには十分すぎる説得力を持つているが。

と、ここまでしつかりと考えてみたが、そもそも、私を知る「彼女」は、既に亡くなっている。……はずだ。

これが現実でない、という現実には引き戻されて、それでも邂逅した「彼女」の名を叫ばずにはいらなかった。

「アグリアア!」

アグリアは、両耳を押さえ、煩わしそうにこちらを見つめる。アグリアの表情は、少し、嬉しそうだった。

手を戻し、表情を不満なものに切り換えて、アグリアは口を開く。

「うっせえから叫ぶなよ、ったく。……ほら、んなどころに突っ立ってないで、いいから着替えを手伝えつての。つか、今までどこほつつき歩いてたんだよ」

アグリアを見て涙腺は緩み、視界が潤んでいく。胸は熱くなり、これこそまさに感動の再会! ……とはならなそうだった。

原因は一つ。

アグリアは、黒の下着だけという格好で豪華なベッドに座り、床に届かない足をぶらぶらさせながら、右手に黒い長手袋を握り締めてブンブンと振り回しているのだ。とても不満ありありという雰囲気は滲み出ている。

私はもはや、溜め息すら出て来なかった。仮にも、か・り・に・も、アグリアは女の子なのだ。もう少し気にして欲しい。

「もう、アグリアは他人の目を意識しなすぎです。私達だから良かったものの、男の人に見られたらどうするんですか」

ドロツセルの小言に、アグリアはさぞ面倒そうな表情を浮かべ、反論する。

「いつも一日の大半はこの格好じゃん。何を今更……ほら、レイア。ドロツセルのお嬢ちゃんがつっさいから早くこっち来いよ。着替え手伝え、着替え」

呼ばれて、すぐに、私は我に返り、取り繕う。

そうだった。今の私は、アグリアの侍女なのだった。危なかった。ぎりぎりセーフ、かな。

アグリアの言葉に従い、彼女に近付く。彼女の姿に呆れ顔を作り、文句を言いながら。「着替え着替えって、大体普通、一人で着られるでしょ?」

「はあ? 何言ってるんだ、レイア。お前、変……は、いつものことか。よつと」  
「ん?」

アグリアの目の前まで行き、着替えて着替えてしつこく繰り返す彼女に、さて何をすべきかと考えていると、彼女はベッドからぴよんと飛び降り、私の目の前にしゃがみこんだ。

すると、何の躊躇もなく、アグリアは私のスカートを捲る。裾が足元まであるはずのメイド服のそれが、勢いよく捲り上がった。

舞い上がる焦げ茶色のロングスカート、私の視点からではまったく見えないが、下着がアグリアに晒されているのは間違いない。

「きやあ!」

急いで押さえても、もう遅い。見られてしまった。風の精霊よりも、もっと性質の悪い彼女に。

「んだよ。またガキっぽいパンツ穿いてんな。そんなだと、いつまで経つても医者のがきんちよに振り向いてももらえねえぞ?」

感動できない理由が一つ増えた。彼女の決定的な言葉に、私は溢れそうになっている涙の泉に、寸前のところで栓をする。

「アグリアーツ!!?」

風の精霊よりも性質の悪い彼女は、私の抗議さえもスパイスにして、心底楽しそうに笑い転げたのだった。

###

慣れないドレスの着付けに悪戦苦闘しながら、私はなんとかしてアグリアにドレスを着せた。正直自信は無かったのだが、正解の着付けを出来て安堵した。また、彼女の言うことであれば、化粧もしなければならぬらしくて。これまた不慣れな化粧をアグリアにしていると、「なんか化粧の仕方、変わったか?」などと勘繰られる始末。

色々な意味で誤魔化しながら彼女のメイクアップを終え、溜め息を吐きながら、私は側にあつたソファアに腰掛けた。今日何度目の溜め息か、数える気も起きない。ギガントモンスターとの戦闘よりも、何倍も疲れてしまった。アグリアは今、姿見の前で最終

確認をしている最中だ。

彼女の、いまだ消えぬ不満気な表情を見ると……なんとというか、その、化粧くらいは、少しだけでも覚えておくんだったと申し訳なくなる。

漆黒に、けれど時折燈るように覗かせる深紅色が、野生的な印象を与える細身のドレス。彼女に酷くぴったりだ。くるりくるりと姿見の前で確認するアグリアは、間違い無く女の子……なのだけだ。どうして先程はあんなに無頓着だったのだろうか。

「はあ……なんで私が宴会なんか」

及第点は貰えたようで、視線を姿見から私の方へ変えながら、アグリアは憂鬱を吐いた。肩を落とした彼女は、茎の折れた花のように見える。これくらい大人しければ、可愛い。あと、口が悪くなかったら、可愛い。基本的には、彼女は可愛い。はず。私の感性がアレじゃなければ、間違いない。

「宴会、じゃなくて、パーティ、でしょ？　そういうところよ、そういうところ」

おそらく伝わってないであろう私の文句は、部屋の空気に溶けていく。

「別に変わんねえよ……やだー、レイアー、助けるー」

「ダメダメ。お呼ばれされてるんだから、行かないきや」

「……レイアって、こういう時クソ真面目だよな」

褒められたのか貶されたのか良く分からない評価をいただいた私は、とりあえず姫に

は感謝の言葉を返しておいた。姫は途端に、むすつとする。……膨れっ面は、可愛いかもしれない。実に女の子らしい気がした。

「……なあレイア。ここから抜け出そうぜ」

「はあ？」

「だって面倒だろ、どう考えたって。だから、逃げちまおう」

「そ、そりゃあ分らないでもないけど、でも……」

「いいからいいから。レイアは、いつもどこから抜け出してんだ？」

「え、ええつと、それは……」

知りません。

とは言えない。私は今、何の因果か、この屋敷で働く侍女なのだ。それも、アグリア専属の。

侍女、と言われた手前、少し構えはしたものの、どうやら基本いつも通りで問題はなかった。そのことには少し安心する。私の中のイメージの侍女は「お嬢様、お嬢様」と丁寧にくすぐすものだと訴えているが、生憎、侍女の心得など私は持っていないのだ。あののは、ル・ロンドでやっていた看護師ごっこの心得だけ。なので、現状、非常に助かっていた。

変な言動から、ぼろが出てしまうのは本望ではない。ここは無理をしてでも、不自然

であつても、アグリアを甘えさせるわけにはいかないのである。断じて、今までの彼女の我儘への仕返し、ではない。

「や、やつぱり、素直にパーティーに行かないと!」

「ちえー。レイアのケチ。お前つて甘々な時は甘つちよろいんだけど、こういう時だけ厳しいんだよなあ」

ケチと言われても、ケチるような情報は持っていない。

私が苦笑いを浮かべると、アグリアはベッドに倒れ込んだ。そのまま彼女はシーツの中へ潜つていく。ああ、ドレスも化粧も髪形も崩れてしまう……あれだけ時間を掛けたのに。そういうところなんだよ、そういうところ。

「このまま時間まで寝させてもらうから、よろしくー」

「ちよ、ちよつと、アグリア?」

シーツ越しに聞こえた彼女の声は気だるそうで、私がその後何度呼びかけても、返事は無い。

耳を澄ますと、寝息が聞こえてきた。

本当に眠り始めたのか、この子は。呆れてしまう。

案外、今日のパーティーが楽しみで昨日よく眠れなかった、とか、そういう理由で寝不足なのかもしれない。

そうだと可愛いんだけどな。たぶんきつと、違うと思う。アグリアだし。

本当は、こんなことを考える暇があるなら、一刻も早く起こすべきなのだろう。服も乱れる。髪も、化粧も崩れる。それは避けるべきだ。主に、必死に着付けをした私が、可哀想だと思う。まあ、アグリアはむしろ、綺麗なままは嫌だと言いつつ、と浮かべ、その「訪れそうにない未来」が微笑ましく切なくなつた。

なんだかもう、どうでもいいや。それならいつそ、最後くらいは彼女の我儘に付き合つてもいいような気がしてきた。

甘々な私もアグリアが包まれるシートに潜らせてもらい、その隣で少し寝させてもらおう。もろもろの事情により、私もどつぱり疲れたのだ。

横になり、穏やかに眠るアグリアを眺める。

近くで見るとアグリアの寝顔は、それはもう、失くしてしまうには惜しい程の魅力がある。そばかすすら、チャームポイントに変えてしまえる整い具合だ。

皆がこの子の事をちゃんと見ていけば、あんな結末にはならなかつたのだろうか。私がつもつと早く気が付いてあげられたら、何か変わったのだろうか。

もう二度と会えないと思つていた彼女と再び出会い、私は感傷に浸つた。もしも、を考へるのは無駄ではない。が、あまり固着するのもよろしくない。そういうことは分かつてゐる。……つもり。

大切なのは結果で、生きている現在を、どう捉えるか。

もしもを考えるのは「感傷に浸るため」ではなく、「原動力を得るため」に。

とか言いつつ、今こうして無防備に眠りこけている彼女を、感傷に浸りながら眺めるのは、正直悪いことではないように思えた。

少し前から旅、新聞記者、旅、新聞記者、旅というサイクルで生活していた私だ。まるっきりの平和が、今までのどれもが霞むくらいに私を誘惑してくるのは、知っている。

こんな現実が続けばいい。

こんな現実が来ればいい。

何事も、平和が一番。

こういうサンプルを見せられたら、誰だって羨んでしまうし目指したくなる。

平和のためなら、戦っていける。

指にファンデーションが付くのもお構いなしに、私はアグリアの頬を人差し指の腹で撫でた。化粧越しだけれど、彼女の触り心地は、予想以上にいいものだ。もつと、もつと、撫でてしまう。

「呑気な顔しちゃって……」

くすぐったいのか、彼女はたまにぴくぴくと動く。それが面白くてしばらく続けていると、私もとうとう、まどろんできた。

よし、ようやく眠れる。

夢みたいに幸せなまま、幸せな夢を見たい。

例えこれが、現実逃避と呼ばれる行為だとしても、それでもいい。

いままでの頑張りを思うと、これくらいのご褒美を貰っても罰は当たらないだろう。

私はアグリアの温かい手を握り、そのまま舟を漕ぎ出したのだった。

……でも、甘えたくなったら、たまには甘えていいよね。ね、アグリア。

『は、いつか醒めるモノ』

どれほど眠っていたのか、よく分からない。眠り始めた時間が定かでないのだから、仕方ないことだ。

気が付けば、夕方だった。

差し込む夕日が眩しくて、シーツから抜け出した私は、そのままカーテンを閉めた。

その後の行動はよく覚えていない。私個人、寝起きは得意でない。見ていた夢は幸せなものだった気がするけれど、ぼやけていて思い出せない。忘れてしまうのがほとんどで、それはいい夢も悪い夢も同じだ。

ようやく頭がはつきりしてきた頃には、いつの間にか元の服に着替えて、アグリアの眠る部屋に戻って来ていた。彼女はまだ、起きる気配すらない。心地よさそうな寝息が聞こえる。

これが現実であつたとほっとする一方で、夢でなくて悲しいと思う気持ちが湧いて出てくる。

と、部屋に誰かが入ってきた。

振り向けば、そこには私の仲間がいた。今の、現実を共に歩く、強くて、強くて……

とにかく強い仲間だ。

「もう、いいか？」

「……うん」

ルドガー・ウイル・クルスニク。彼は、アグリアを起こさないように、小声で私に話し掛けてくる。私が始まるまで待つていたのだろうか。口ぶりから、どうも今までの私の動きを理解しているような節がある。その彼の、悲しんでいるような眼差しが、私の心を締めつけた。

分史世界に侵入し、カラハ・シャルルに出て、情報を集めている最中にドロツセルに捕まって。この世界で私は、「抜け出し癖のあるアグリア専属の侍女」となっていて。

その私の認識に、彼から聞いた話を加味する。

ルドガーたちは、この世界の私に捕まり、共にこの街の色々を見て回ったそうだ。

だが、どこも空振りとのこと。

しまいには、街の外に世界が無い、とまで言ってきた。街の外へ行こうとすると、まるで見えない壁でもあるかのよう。何か〃に阻まれるのだそうだ。

〃何か〃が、人が遠くへ行くのを拒んでいるかのよう。

街の人たちですら、無意識に、街の外へ行こうとしないらしい。

つまり、時歪の因子があるとすれば。

「やっぱり、アグリアが……時歪の因子？」

「……ああ。間違い無い」

「そっか……」

元から、薄々、勘付いていたことだった。

性質上、正史世界と最も異なるものや生き物に憑き易いという「ソレ」は、私の予想通りであった。ルドガーが言うのだから、絶対そうなのだろう。

この分史世界の時歪の因子は、アグリア。化粧をしている時に本人から聞いたのだが、この世界で彼女は、一人になっていた所を領主ドロツセルに拾われ、お嬢様として生きているのだとか。

一度、別の分史世界でアグリアを見たことはある。あの時の彼女は、仕事仲間だった。その世界はもう壊してしまったが……今思えば、あの時、エルを連れて行けば、アグリアを正史世界に持ち帰れたのではないだろうか。あの時の時歪の因子は彼女でなかったし、正史世界でのアグリアは既に死去しているのだから、可能ではあっただろう。ただの自己満足になるだろうけれど。

話を戻して。

本音を言えば、この分史世界の時歪の因子だとしても、アグリアは出来れば壊したくなかった。例えそれが、私の甘い考えから来る我儘だとしても、本心はそうなのだから

しょうがない。

こんなことを言っていていられないのは分かっている。これはやらなければいけないことだ。エルが居ようと持ち帰ることは不可能であるし、そもそも時歪の因子を壊さなくては、私達も正史世界に帰れない。結局、彼女とは、もう二度と同じ世界で住めないのだろう。彼女を失った時から、これは定められた運命なのだと思う。

「……そう言えば、皆は？」

話を变えたくて、ふと、どこにもいない仲間たちを思い出した。

「まだこっちの世界のレイアに連れ回されてるよ。久しぶりに会えたのが嬉しいのか、だいぶテンションが高い」

「あはは……なんか、ごめん」

「いや、おかげで邪魔されずに済みそうだ」

ルドガーは、アグリアアのベッドにゆっくりと近づきながら、小さく呟いた。その横顔に、揺ぎ無い決意を滲ませながら。彼としても、邪魔はない方がいいのだろう。誰だつて、望まない戦いはしたくない。邪魔の無いまま、時歪の因子を破壊する……つまりは、この分史世界を破壊する。それができるのはルドガーだけであり、同時に、彼に課された残酷すぎる使命だ。

「……ねえ、ルドガー」

「ん?」

よぎった想いは、慰めなのか、罪悪の意識なのか、逃避なのか、なんなのか。

「ちよつと考えちゃったんだけどさ、骸殻の時の武器って、私、持てるかな?」

「なんでだ?」

「持てるんなら、私がやるうかなくて思つて。骸殻の武器なら、私でも時歪の因子、壊せるでしょ? ……多分、ね?」

本音はアグリアを壊したくない。が、これは我儘で、実際はやらねばならない。

ならば、この世界を、私の手で、壊したい。

ならば、アグリアを、私の手で、壊したい。

結局のところ、今の彼の気持ちも、ついさつき私に浮かんだ想いも、永遠に分からないのだと思う。けれど、でも、だからといって、ルドガーだけに壊させるのは、なんとなくダメな気がする。理由も理屈も分からない。それでも、「偏つた思い」だとしても、そう思つてしまつたのだ。

彼は根が優しいから、私の思いも一緒に乗せて一人でやる、と言つてくるだろうし、その光景は容易に想像できるのだけれど。

「だ、だめならいいんだけど……」

「……はっ」

「……え？ い、いいの？」

「試すだけならな」

彼は骸殻を纏い、世界を壊す槍を手にすると、そのまま私に渡してきた。私の想像の一枚上手をいく、優しさ。これこそが、彼の優しさの神髄。

あるいは、感触を知らせ、重さを知らせ。全てが終わってから、作り出した破壊の槍に私の思いを乗せていました、とかいうつもりなのだろうか。もちろん、私としては、興味本位で言ったわけではないし、軽い気持ちで頼んだわけではない。彼に私の思いの丈が伝わっておらず、なにかしておけばどうにかなる、と思ってくれたのだろうか。

甘い。これでもうにかなりそうな私も十分に甘いけど。

黒々しい鈍い輝きと、鮮やかな力の奔流を象徴する様な金色の装飾に、しばし圧倒される。呆けたままというのもアレなので、気を引き締めて、恐る恐る、といった風に槍を握ってみた。

「……」

結論から言えば、触れた。握ることができた。案外軽いな、とも思えた。

……のだが、結果や感想を言わなきゃいけないのに、私の口からは何も出て来ない。体が凍ったように冷えていくし、固まっていく。視線を、槍から離せず、ただただじつと、見詰めてしまう。

これが、世界を破壊する武器……。

「……レイア、なんなら部屋の外で待っててもいいんだぞ」

呑まれていることに気が付いてくれたのか、何も言えなくなった私を彼は氣遣ったが、私はそれを力なく拒否した。恐怖によって凍らせられた私だったが、せめて、その最後までを自分の目で見届けたいとは思えないと思う。それが筋というものではないだろうか。

改めてベッドに近付いて行くルドガーを眺める。私の手が、震えだした。すでに何回も世界を壊してきたというのに、今回のこの世界が壊れるという現実に、今更になつて寒気を感じる。これで、世界を破壊する責任を分かつたつもりでいたのだから、自分の考えは、ここにきて酷く甘いものなのだと痛感した。

と同時に、彼はあの槍で、世界を壊す責任を背負ってきたのかと理解する。今まで、ずっと。おそらくはこれも、私が考えるよりもっともっと大きなものだろう。

いつだって私は、甘いんだ。

甘やかしてしまふんだ。

他人にも、自分にも。

「アグリア……」

おそらくはもう会えないだろう彼女の名前を呼ぶ。返事をしてもらいたかったわけ

ではないので、だいぶ小声になる。

彼女の声はもう、永遠に聞けないだろうなあ。あの時のアグリアの言葉が最後になるのか……少し残念。

なんていう回想も、甘かったようだった。

「レイ、ア……」

瞬間、息が上手く吸えなくなる。アグリアの口から、私の名前が零れたのだ。

十中八九寝言だろう。絶対に寝言のはずだ。そう思わなければ、返事をしたところだった。

それでも襲ってくる駆け寄りたくなる衝動を、震える手を強く握ることでなんとか押さえた。一瞬、掌に爪が食い込む痛さが脳天を突き抜けたけれど、これからアグリアに訪れる痛みを思うと、気休めにもならない。

「ごめん……ごめんね、アグリア……」

彼女に決して聞こえない声量で、私は呪詛を紡ぐように、彼女の名前を口にする。ここは、なんとしても自分に厳しくしよう。甘えてはいけない。絶対に聞こえない声量を心がけなくてはダメだ……ダメだ……ダメだ……

押し寄せる情けなさや切なさは、先程栓をした涙の泉を刺激し、栓を跳ね退ける。

涙が溢れ出した。もう止まらない。止めようとも思えない。嗚咽は堪えようとして

いるけれど、こちらはなるべく小さく抑えるので精一杯だった。

私が自分自身の嗚咽と戦っていると、唐突に、音が聞こえた。

ベッドに槍を突き刺す音。

シート越しに、硝子が割れる音が一度だけ、小さく鳴る。

それがきつかけであるかのように、だんだんと、時計の時を刻む音が大きくなり始めた。

つられて何か壊れる音が遠くから聞こえ、それは互いに共鳴するかのように響き合っている、こちらに迫りながら音量を大きくしている。

そして、世界は割れ行く。

視界が一瞬真っ白になり、私は眩しくて目を瞑る。

私が次に目蓋を開けた時にはもう、元の世界に戻っていた。

## 『が醒めた、その後』

カラハ・シャールを撫でるように、精霊が風を運ぶ。楽しそうな笑い声が聞こえそうなそよ風が、涙を流した目を冷やす。寝起き、もとい、泣き止んだ後には少し優し過ぎる風に、私は目を細めた。

むしろ、砂埃を運ぶ位の風が吹けば、いざという時のいい訳を作りやすい。ゴミが入ったとかで誤魔化せるのだから。

「大丈夫か、レイア」

「ルドガー……。うん、私は大丈夫だよ。平気平気！」

「……ごめんな」

「な、なんでルドガーが謝るの？ アレは分史世界なんだし、あの子は時歪の因子だったし、仕方ないことだよ」

「気にしないでと続けた私の言葉を聞いて、しばし思索したルドガーは、何かに気が付いたのか目を伏せる。

「……無理やり納得しろ、とは言わない。時間を掛けたとも言わない。納得できないことも、認めたくないことも、きつと俺が思うよりも、世の中にはあるんだろうからさ」

見透かしているみたいだった。目蓋を閉じながら、ルドガーは確かに私を見て、言葉を投げる。私の中のみで見て、言葉を紡ぐ。

「仕方ない、なんて言っつて、自分に嘘を吐かないでくれ」

「ル、ドガー……？」

「素直でいることも、大事だぞ？」

彼は目蓋を開け、優しい眼差しで言う。……ずるい。これでは……甘えなくなる。甘えちゃいけないのに。もう甘えないと決めたのに。彼は私よりももつともつと辛いはずなのに、我慢してはるはずなのに。

せつかく栓をした泉が、私の言葉と共に、再び溢れ出した。

「……嫌、だったよ……アグリアと、また、お別れなんて……嫌だった……」

「守りたかった……あの時、手を離しちゃったのだから、私が悪いのに……どうして、アグリアが、居なくなると、いけないの……どうして……!!」

彼は黙って聞いてくれてる。私の、言わば過去の出来事への文句を、彼は何も言わずに聞いてくれてる。彼は優しいから、聞いてくれてる。その優しさにすがった私も私だが、とても心地いいのは事実だった。

たぶん、困った顔もしているだろう。私は泣き顔を晒すつもりはないから、彼の表情

までは確認できないが。

優しい彼なら、それでも笑顔を浮かべようとするんだろうな。

その光景をしつかりと思いい浮かべられてしまうのだから、彼に甘えなくなってしまうんだ。

とはいえ、私を解したのは彼なのだから、少しくらいはその責任を取って貰おう。

私は彼の胸を借り、周りのことも気にせずに、文句を言いながら大声で泣いたのだ。た。

###

「ありがとね、ルドガー。その……」

「ああ」

涙も止まり、淀んでいた言葉も全部出ただけあって、私は非常にすつきりとしていた。彼の胸元は……私がちよっと恥ずかしくなるくらいに、濡れている。洗濯した方が良さそうなくらいに、濡れている。あるいは弁償か、別な服を贈るくらいした方が良さそうである。後で買ってあげるか。今のところ、お金はなんとかなってるし。

彼の服の弁償を決意した私は、同時に浮かんだ私の気持ちを、彼にぶつけることにした。

「ね、ルドガー」

「ん?」

「この世の中、上手くいかないことだらけだし、取り返しのつかないことだらけだけどさ。だからって、『夢』に逃げちゃうのは、ダメだよ。『夢』はいつか醒めちゃうもの。昔のことを忘れないために時々思い返すことはあっても、ずつとはしない。しちやいけない。私、きちんと、今と向き合おうと思う」

「……」

清々しい笑顔を浮かべて、ルドガーの目を見て、私は言う。

「過去は、取り返せないもんね」

「ああ……」

いい笑顔を見せられたろうか。いや、たつぷり泣いた後だから、多分、ちよつと酷い顔な気がする。こういう時は、化粧をしていなくて良かった、と素直に思えた。

「私、今を生きるよ。今を生きて、しっかり見て、それをきちんと皆に伝えられるようになりたい」

「……そっか」

物事を簡単に割り切れる性格だったのなら、もつと楽に生きられたはずだ。けれど私は、迷いに迷い、悩みに悩み、甘えに甘えてきた自分の過去を、決していらなかったものだとは思えなかった。あの自分がした失敗も、恥ずかしいことも、全部が今に繋がっ

ているわけで。それらを否定すれば、今の私を否定してしまう気がした。いや、絶対にそういうことになる。「アグリアのことを後悔する自分」まで否定するのは、やってはいけないことなのだ。自分のためにも、アグリアのためにも。

この後悔だけは、なんとしても、息絶えるまで絶対に持ち続けないと。そうだ。次のお休みの日は、アグリアに報告しにでも行こう。いろいろと、お話ししたくなった。今まで見てきたことを、私の言葉で、アグリアに伝えたくなった。例えばそれが一方通行でも、私がしたくなった。

カラハ・シャールに住まう精霊は、私の決意を聞き、ゆっくりと大風車を回した。いつだって風は、どんな形であれ、私の隣に吹いているのだと教えるかのように。ゆっくりと、ゆっくりと。

重々しい音が私をしつかりと支えているみたいで、私は自然と頬を緩ませる。うん。あなただけじゃないよね。支えてくれているのは、皆も一緒だよ。きちんと見て、ちゃんと皆に伝えるよ。

風の精霊とルドガーに見られながら、私は再び自らの頬を叩く。その私を見て、彼らは笑ってくれた。

「おーい！ レイアー！ ルドガー！」

共に歩く仲間が向こうから駆けてくる。タイミングからして、もしかしたら見られて

いたかもしれない。だとしたら大問題……でもないか。恥ずかしいは恥ずかしいけれど、私がこういう性格なの、皆知ってるしなあ。

なら、皆が持つ私のイメージに応えるのもまた、私らしいかもしれない。……カツコよくいったけれど、結局は恥ずかしがるのも面倒に感じるほど、色々と疲れたのだ。開き直るのが一番楽に思えたのも、ある。恥ずかしいから、そういうことにおいて欲しい。

私は、手を振りながら皆と合流する。ルドガーはゆつくりとした足取りで合流した。夢はもう、醒めたのだ。

これからは、目を瞑りたくなるような現実をちゃんと見て、歩んでいかねば。

甘えずに歩いて、知らない人にきちんと伝えないといけない。もちろん私の言葉で。彼ほどのものではないけれど、それが私に課された使命だと思うから。